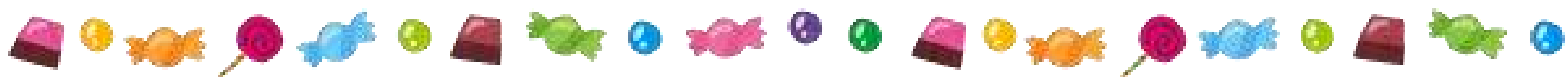


今年の夏も酷暑でした。カスタネット通信10月号がみなさんのお手元に届く頃はどのような気候になっているのでしょうか。今月号はSTの言語指導のお話と読書の秋に向けて、本の紹介です。

言語聴覚士と工作



私たち言語聴覚士(ST)は聞こえ、発音、ことばの発達について相談に来た方々にお会いしています。その中で、ことばの発達の遅れがあるお子さんには、そのお子さんの発達に合わせた言語指導を実施します。大きな目的は「ことばの理解および表出の促進」です。そのために、カードやパズル、絵本、ゲームなどさまざまな教材を用いて指導を行うのですが、それらの教材を用いるだけでなく、子どもたちと一緒に「工作」をすることもあります。「工作」というと「ことば」とはあまり関係が無いように思われるかもしれませんが。そこで「工作」の目的を簡単にお話しします。

指示理解

STが作った見本を見て作ることもありますが、「半分に折る」「ひっくり返す」などの説明を聞いて作ることもあります。「葉っぱは3枚」「茎を描く」などの指示をしながら作ることもあります。



↑ 春：チューリップと虫
虫の足は何本か、虫の形、色なども考えます。
茎と葉っぱも描きます。

ことばで表現する

工作に使用する道具をあらかじめ用意しておく場合もあれば、「何で貼る?」「何色で描く?」「蝶々はどんな形にする?」「他に何が必要?」など会話をしながら作ることもあります。テープで貼るのか、のりで貼るのか、何色の色鉛筆で描くのか、考えてことばで伝えてもらいます。

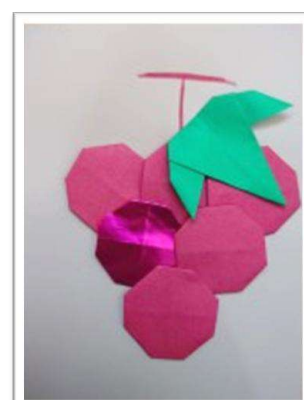


↑ 春：カラフルなお花
花びらと顔の色を選び、好きな顔を描きます。

季節を感じる

写真は最近子どもたちと一緒に作成したものの例です。春はチューリップと昆虫、夏はアサガオ、秋はブドウ、冬は雪だるまとサンタクロースなど、その季節になると道端やお店で目にする機会が増えるものです。自分が作った作品をきっかけに、日常の会話に繋がるとよいと考えています。

これらはSTが見本として作成したものなので、面白みがないのですが、子ども達の作品はどれも個性があり、斬新です。そこに貼るの!?!と思う時もありますが、おとなの価値観を押し付けないようにしています。⇒⇒



手指の巧緻性を高める

手先を使うことは、ことばとはあまり関係が無いように思われますが、直線を描く、くるくる円を描く、という動きは文字を書くということにも繋がります。また、細かい動きを意識するということは、発音にも関係します。



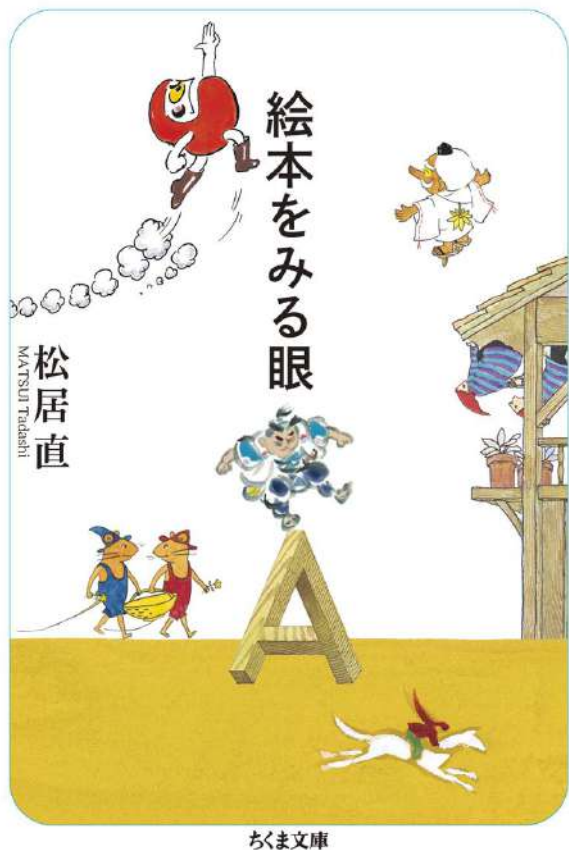
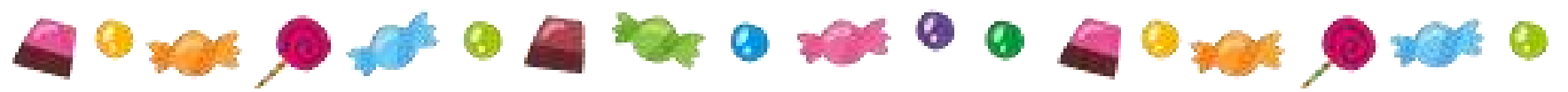
複数のものを提示されたとき、その中から好きなものを「選ぶ」ということは、子どもにとって時に難しいことがあります。全部欲しくなってしまう、STが作った見本通りに作るものだと思ってしまう、などといった理由で選べないことがあります。自分で「選択し、それを他者に伝える」ということも大切な発達です。

「工作」の目的をいくつか挙げました。作るものは同じでも、「貼ることを課題にする」「自分で折ったり描いたりすることを課題にする」など、何をお子さんに実施してもらおうかでその目的や難易度が変わります。そのため、「工作」は幅広い年齢層のお子さんの指導に使用できるのです。



↑ 何色のお花にするか、雪だるまの帽子やマフラーはどれにするか、どんぐりはどの組み合わせにするか、自分で選びます。

『絵本をみる眼』 松居直著



新刊図書のコーナーで、だるまちゃんとてんぐちゃん、ぐりとぐら、ももたろう、スーホと白い馬、安野光雅さんのアルファベットや小人が表紙になっている本を見つけ、豪華だな、と思って手に取りました。福音館書店の編集者だった松居直さんの本でした。

「絵本は子どもが読む本ではなく、大人が子どもに読んで聞かせる本だ」という考えだった松居さんは、「現代」は幼児に早くから絵本を独りで読ませるようになってしまっている、子どもが聞くのはテレビの音声ばかり、と懸念されていたようです。最近は忙しい生活を送っている人が多いし、子どもが興味を持つコンテンツが世の中に氾濫しているからなあ、と思いながら読んでいました。

読み進めるうちに、ソ連、西ドイツ・東ドイツ、チェコスロバキアといった国のはなしが出てきて、ん？と思い、刊行日を確認したところ、なんと1978年1月でした。私が購入したものは「ちくま文庫」から今年の5月に出ているのですが、もともとは「日本エディタースクール出版部」から約半世紀も前に刊行された本でした。若い編集者向けに編集者としての心意気を伝えるための本だったのかな、と思うと同時に、その頃からすでに「子どもに絵本を読み聞かせる」という時間が少なくなってきたのだな、と思いました。

絵本は文を書く人と絵を描く人によって作られているのだろう、という素人考えでいましたが、この本を読むと文を書く人と絵を描く人をマッチングさせているのが、編集者だということが分かりました。お話に合った、子どもが絵本の世界に入り込めるような、リアリティーがあり、動きのある絵を描けるのは誰だ？と考えるそうです。

「絵本をみる眼」にはオギジビ文庫にある絵本がたくさん登場します。ぐりとぐらが初めて登場するシーンで後ろ向きなのはなぜか？てぶくろにはなぜ7匹もの動物が入れたのか？桃が流れてくる音が"どんぶらこ、どんぶらこ"ではないのはなぜか？おおかみと七ひきのこやぎの印刷前に発見された大きな誤り、など絵本制作過程の裏話として楽しみました。絵本も並べながら読むと、そういうことか！と分かるのでおすすめです。私が再度読みたくなった絵本は子どもの頃大好きだった「だいくとおにろく」。

編集者は縁の下の力持ち！「さく」「え」だけでなく「へんしゅう」も表紙に書いたら良いのに、と思いました。



おぎはら耳鼻咽喉科